慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	著者リプライ
Sub Title	
Author	本多, 真隆(Honda, Masataka)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2019
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.24 (2019. 7) ,p.203- 205
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20190706-0203

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

著者リプライ

本多　真隆

まずは、ご多忙中のところ書評のご執筆をお引き受けいただいたことに感謝を申し上げます。拙著への過分なる評価と、的確かつ密度の濃いご批評は、大変有難く読ませていただきました。以下、僭越ながらリプライとさせていただきます。

実に刺戟的な体験をさせていただいた。これは有末氏の書評から新たな視界を開かせていただいたことに対する感謝からばかりではない。氏の書評を通して、拙著を執筆していた際に考えていたことだけでなく、私自身も忘れかけていた思考の奥底に沈殿していたことなどを再構成することができたからだ（たとえば江藤淳の「母」に関する評論は、卒論で取りあげたこともあり、私の初発の問題意識のひとつだった）。書評という場を通してこのような思考や記憶の共有をさせていただいたことは、面映ゆくありつつも緊張感に満ちた体験であった。

さて、有末氏が提起された疑問点や論点のいくつかには、私はすでに収集している資料をもって応答することができる。だがここでは（字数制限が一番大きな理由ではあるが）、資料の取捨選択の基準や、用いなかった（られなかった）理由、今後の研究計画を中心に回答させていただきたい。私の手持ちの資料のなかには、氏の疑問点と照らし合わせると、意図的に用いなかったものもあれば、自分でもなぜ用いなかったか不思議に思うものもあった。このことは、あらためて拙著と社会との関係、とりわけ「今」という時代との関係を再考させた。こうした時代認識を含めて問題意識を共有させていただくことで、今後の私の研究の展開も含めてではあるが、誠実な回答ができると思う。以下では、①拙著の「二項対立」の問題（氏の一点目の疑問）、②「家族情緒」という対象設定（二点目、三点目）、③拙著で「書けなかった」ことと今後の研究（全体）という順で記させていただく。

第一の「二項対立」の問題、とりわけ有末氏も問題視されている「保守対革新」の図式であるが、私としては、これはかなり意図的に設定して「いた」ものだった。というより拙著の問題意識のひとつは、「家族」をめぐる「保守対革新」を考え直すことにあった。周知のとおり「近代家族」論は、家族史研究の新たな潮流であっただけでなく、その家族のあり方を批判的に捉え直すものでもあった。ここで提起されたフェミニズム的な問題意識については、私は現在でもなお有効性があるものだと考えている。だが一方で私は、執筆時の家族と政治の関係、とくに政治介入のあり方やそこで打ち出されている家族イメージを考える上では、近代家族論に物足りなさを感じてもいた。こうした疑問を抱いていた私にとってインスピレーションを感じら

本多真隆「著者リプライ」
『三田社会学』第 24 号（2019 年 7 月）　203-205 頁

れたのが、拙著で中心的に取りあげた「保守的（とされる）」な論調および、それらのなかで言及されていた家族情緒に関する言説だったのである。そのなかでも私が興味をもったのは、近代日本における「保守的（とされる）」言説が、「革新的（とされる）」価値観や言葉を簒奪しながらその一部を排除し、持続していくメカニズムにあった。拙著ではこれを「近代」の産物としての「『家』の情緒」に関する言説として考察し、理念型としての「近代家族」的な情緒と対比的に論じることに注力した。だがその過程で（煩雑さを避けるという意味でも）、「保守対革新」という政治思想的な問題設定はやや後景化し（させ）たように思う。この「二項対立」の問題については、その図式自体の再考も含めて、別個の作業として取り組んでいきたいと考えている。

続いて第二に、「家族情緒」の問題設定という点から、いくつかの疑問点に回答させていただく。上述の通り私の問題意識は、公的イデオロギーの側面に傾いていたが、資料の収集の過程で、「日常生活」に属するもの（その多くは悲惨さと表裏一体である）ももちろん目に留めてはいた。だがそれ以上に論じる必要があると私に感じさせたのは、こうした情緒や悲惨さと同時代にある支配層（主に男性）の関心のあり様だった。花柳界の「身売り」をめぐる男性知識人の語りなどに顕著であるが、「家」にまつわる情緒や悲惨さに一定程度は理解と同情を示し、その文化圏に同一化しながらも、そこでの悲惨さを自らのものとして改善しようとはせず（この点で「経世済民」志向のある柳田國男の議論は位置づけが難しかった）、「犠牲」を離れた場から称揚するような意識のあり様は、近現代日本の「家族主義」のあり方を考える上でも重要であるように感じられた（日本語でいう「情緒（がある）」というのは、まさにこのような主体と客体の距離感にあるのではないだろうか）。こうした意識の分析は別個の分析枠組みを要すると思い、拙著ではかなり割愛したが、私としては、有末氏が提起された「家」と「近代家族」の連続性や、制度と個々の家族の関わりを捉える上でも、まずはこうした男性側の文脈を詰めていく必要があると考えている。

最後に第三の「書けなかった」点についてであるが、これは半ば無意識的な選択が含まれている。たとえば論者たちの「アジア」の家族への関心については、資料もある程度収集しており、それらの国々との対比で「日本」の家族を浮き彫りにする文脈についても注意を払っていた。だがこれらの資料は結果的にほとんどが使われないままになった。その理由としては、拙著の主題であった「『家』の情緒」の言説には、「西洋（欧米）」との対比という力学の方が強く働いていたという判断もあるが、「アジア」と「日本」という対比は現在進行中の問題でもあり、分析を無意識的に留保したのだと思う。やや踏み込んでいえば、私は、「西洋（欧米）」との対比で「日本」を立ち上げる話法は、現在では賞味期限が過ぎてきたものだと考えている（そのステレオタイプは蔓延してはいるが）。それに対し「アジア」と「日本」の関係は、グローバル経済の浸透や近年の排外主義的な傾向など、かつての歴史を引き継ぎながらも目まぐるしく揺れ動いている。ある時期に形成された「『家』の情緒」をモデル化するというのが拙著の主な作業ではあったが、「アジア」との関係（もしくは女性の言説をはじめ本論で捨象してきた文脈）

についても、自分のなかで醸成させ論じていきたいと思う。

有末氏が提起された論点に回答し尽くせていない点も残るが、以上でリプライとさせていただく。ここで取りあげたこと以外にも、氏の書評からは気づかされるところが非常に多かった。今後の研究で「全体史」を目指すとしても、どのようなかたちになるかは自分でもわからない。いずれにせよ、このリプライを書き上げる過程で絶えず考えていたのは、歴史というのはやはり現代史であり、研究という抑制的態度を維持した上でも、それを現在の文脈にも開いていく必要があるのではないかということだった。

（ほんだ　まさたか　明星大学人文学部）